

# Ken Wilber のヒューマン・ネイチュア論紹介

## ——ODYSSEY の全訳を通して (Part II)——

村 島 義 彦\* ・河 野 昌 晴\*

曾 我 雅比兒\*\*・小 山 悦 司\*\*

\* 岡山理科大学基礎理学科

\*\* 岡山理科大学教養部

(昭和60年 9 月26日 受理)

### <関心の移行>

続く年は、大いなる関心移行の期間であった。私は、禅への傾斜を深めるとともに、禅そのものの実践にいっそう深く入り込んでいった。毎日(3時間は)瞑想し、月に一度は終日の正坐を試みもした。これらは、他人と一諸になされる場合もあれば、自分一人で行なわれる場合もあった。時として、さまざまな形のセッション(sesshins)が生じた。私は、ベスト・フレンドのエミイと結婚し、大学院も中退した。修士号だけで満足し、博士号の方は断念したからである。(とはいえ、最大の理由は、内界地図のいっそうの明瞭化と禅の実践に、私の全時間を献げ尽したい欲求に強く駆られていたことによる)。けれども、多くの友人たち、家族の面々、親戚の人たちには、私がなぜ大学という組織に留まらないかの理由を理解することは、まことにつらい事柄であった。もし、科学の分野で留まるのがいやなら、せめて哲学か心理学の分野でも……というのが、彼らに共通した思いだったからである。『The Spectrum Of Consciousness (意識のさらなる領域)』が出版されると、教鞭をとってみないかという誘いが少なからず舞い込んだ。これらに対しては、あえて辞退を示すことにした。教えることが嫌いだったわけでも、また、ウィリアム・アーウィン・トンプソン(William Irwin Thompson)のように、アカデミックな組織への参加が、われわれの内奥の核心を墮落させると感じたためでもない。そうではなくて、もしも、こういった素材を用いて終日教鞭をとるようなことがあれば、精神のバランスを保つ意味でも、帰宅後、さらに夜を徹して研究を続けなければならないであろう個人的事情を、自分でもよく了解していたからである。加えて、最も単純な作業、たとえば「平々凡々とした(lowly)」手仕事ですら、否そういった手仕事をこそそわけても重視する禅の観念に、私は強く惹きつけられていた。そして最後に、もしも瞑想が私の霊性(spirit)を訓練し、執筆と思索が私の心性(mind)を訓練するなら、私は、世界とどのような関わり

を示すことによって私の身体を訓練し、霊性や心性とのバランスを最高度に保つておくことができたであろうか。当時、バランスというこの意思表示を強く欲するとともに、それを価値あるものと考えていたため、私は、きわめて慎重に、手作業を中心としたパート・タイムの仕事を求めて、これを手に入れた。すなわち、ガソリン・スタンドの従業員、皿洗い、食品屋の店員等である。以来、妻は私を紹介するにあたってこう言うようになった。これが「世界的に有名な作家で皿洗い (world-famous author and dish washer)」の良人ですと。

以上のような状況全体が、ひとつの風変わりな教育としてあったことは、話すまでもなくお解りいただけるものと思う。それは、何よりもまず、謙遜の何であるかを学ぶ教育であった。学位を忘れ去り、書物と論文を忘れ去り、肩書きを忘れ去り、まさしくすべてを忘れ去って、2年の間ひたすらに皿を洗うという状況。それはまた、<sup>〇〇</sup>接地 (grounding) 的教育ということもできた。言葉や概念や書物や課程といった、間接的・抽象的・無形的なものに依拠しないで、まさしく直接的・具体的・有形的な方法で、世界と関わりをもつ中で進められる実地の教育であった。そしてそれは、——私の心をわけても掻き乱したのであるが——現実に味わうさまざまな応報に自らを擦り減らしつつ、<sup>〇〇〇〇</sup>ただもっばら (only) 生活の糧をかせぐためにのみ、この種の奴隷仕事に従事する人たちが受けるところの、実生活を通しての全体教育であった。私は、沢山の人たちと共に生き共に働いた。彼らは、互いに劣らぬ熱心さで仕事に励み、その極端なあけっぴろげの性格と寛大さは、常に変わることがなかった。けれども、無慈悲な運命は、彼らに対し、何らの光明も見いだせない暗澹たる未来と、肉体の酷使による早い時期での身体的老衰をもって、もっばらに報いたのである。これを口にする時、私の唇は、感傷的な響きを発せずにはおかない。それゆえ、こう訴えておきたい。私は、この仕事から離れるにあたり、われわれは共にあるのだという強い意識を伴ないつつ、かつ、人間であることないし同胞であることを共有しつつ、そうしたのでと。こういった感情は、およそいかなる書物にせよ、またいかなる大学にせよ、かつて私に与えることのできなかつたものである。

手仕事—研究—瞑想 (work—study—meditation) といった、この絶妙の配列は、当然のことながら、身体—心性—霊性 (body—mind—spirit) の調和的バランスと柔軟性、さらには、各種の探求に欠くことのできない時間的余裕を供給することになった。この「自由な空気 (free atmosphere)」を胸いっぱい呼吸しつつ、まず第一に為されたのが他でもない、『No Boundary (限定をさらに越えて)』と名付けられた、『The Spectrum Of Consciousness』の一般的普及版の執筆であった。ここでは、内界地図そのものをもっとわかりやすく説明することに努力が払われた。具体的にいうなら、『The Spectrum Of Consciousness』における私の焦点は、ほとんどもっばら、意識の基本構造の

解明に充てられていたのに対し、今回は、これら構造の基本的発達過程とその力学の解明 (dynamic) に、主たる関心が向けられていた（その際、基本構造の理解をさらに練り上げ、幅そのものをいっそう拡大したことはいうまでもない）。

この時期までに、さまざまな方面で、さまざまな人たちによって、さまざまな形で提示された「意識の内界地図 (cartographies of consciousness)」は、事実上、莫大な数に達していた。その一端を紹介するなら、たとえば、グロフ (S. Grof) の着手したサイケデリック剤を用いての内界研究は、善意の仕事とみなされる傾向をいっそう強め、これまでの評価であった、「すっぱい幻想 (acid hallucinations)」の産物といった否定的見解は、ますます影を潜めるようになった。また、マズロー (A. Maslow) の試みた人間的諸要求のヒエラルキーを確立する企ても、急速に人気を博するようになった。そして、ハuston・スミス (Huston Smith) は、すでに、世界にある偉大である限りの宗教の核には、例外なく、意識のヒエラルキーが示されている事実を証拠づける、決定的な研究成果を発表していた。他にも、グリーンとグリーン (E. Green and Green), ティラー (Tiller), ゴールマン (D. Goleman), タート (C. Tart), ヒューストンとマスターズ (Houston and R. Masters), バティスタ (J. Battista), ウェルウッド (J. Welwood), メッツナー (Metzner) 等の手で試みられたさまざまな研究がみられたし、私ことケン・ウィルバー (Ken Wilber) の作成した内界地図もあった。さて、きわめて注目すべきことにも、これらの人たちが提示した内界地図は、すべてがすべて、その本質において同じ内容を示していた。さらには、われわれの説明が共通して欠けているものもあった。他でもない、意識を構成するさまざまの局面ないし構造の層が、どのような発展の道筋を辿り、どのような力学に従って存在するかを一貫して研究し、これを記述する試みである。われわれの前に提示された内界地図は、それぞれに、地図そのものとしての申し分のなさを備えてはいたものの、他方、発展の相に着目する感性を欠いていた。これはまさに、ヘーゲル (Hegel) によるカント批判の要点でもあった。意識の構造的諸層は、始めからそのままの形で与えられていたのではなく、何らかの発展の道筋を辿って (developed) ここに現出したと考えないわけにはいかないからである。私の興味は、この内的発展の過程そのものに強く惹きつけられた。結果として、さまざまの予備的探求が試みられ、さまざまの成果が獲得された。これらの成果は、そののち結晶化して、『The Atman Project (究極意識への道)』として出版された。

ところで、『The Atman Project』を執筆中、これを一時中断に導く主だった出来事が2つばかり生じた。ひとつは、雑誌編集への参加であり、他のひとつは、人間学研究への横道であった。前者の雑誌編集については、事情はおおよそ以下の通りであった。ある時、ジャック・クリッテンデン (Jack Crittenden) と名のる人物が、私の『The Spec-

trum Of Consciousness』を読んで交友を望み、以来、2人の間には着実な文通が交わされた。この人物が、『The Spectrum Of Consciousness』に示された問題領域に深い関心を抱く人たちに向けて、ひとつの雑誌を発刊しようとした。いうならば、『主流 (Main Currents)』『比較宗教学研究 (Studies in Comparative Religion)』と、『超越個人的心理学ジャーナル (Journal of Transpersonal Psychology)』の中間をいく類いの雑誌であった。彼は、私に編集責任者になってくれないか、それが駄目なら、せめて共同編集者になってくれないかと懇願した。この申し出には辞退を示した（根本的には、すでにそのころ、自分の探究にすらオーバー・ワーク気味なのを察知していたからである）。むろん、精神面と知識面で、積極的に支援することは確約した。加えて、彼の雑誌に、4回にわたり『The Atman Project』を連載することにも同意した。こうして、ジャックと私は、（彼が『レ・ヴィジョン (Re Vision)』と名付けた）雑誌編集の仕事に着手した。われわれの間には、固い友情が結ばれた。私は、ついに説き伏せられて、共同編集者の席につくことになった。続いて、巧みなことにも、彼自身は、共同編集者の職を「辞 (quit)」し、「管理者兼出版責任者 (director / publisher)」となった。こうして、チェス盤の上で演じられた優雅ともいえる一連の動きの中で、私は、単独の編集責任者として残される破目に陥ったのである。とはいえ、この時期にはすでに、編集の仕事そのものに喜びを感じるようになってはいた。ジャックの示した編集への熱意ある打ち込みが、私を、回心へと導いたからである。加えて、われわれの『レ・ヴィジョン』は、独特の味わいを備えた雑誌として、声価を確立しつつあった。このように、プラスの材料はみられたものの、他方、今や自らが編集責任者である雑誌に、広大な領域をもつ『The Atman Project』を連載しなければならないという、ややもすれば気を重くさせる立場に自らが置かれている事実が変わりはなかった。論文の連載は、『レ・ヴィジョン』の編集に携わる以前に、すでにジャックと約束してはいたものの、まことに気の重い仕事であった。——こういった私を、大勢の人びとが、わがままであると評判した。それはともかく、『レ・ヴィジョン』そのものは、幸運なことに、第4号の出版まで順調に運んだ。私の前には、思いのままに筆を走らせた軌跡としての論文の束が、徐々に姿を現わし始めた。

さて、『レ・ヴィジョン』の出版が、そのまま順調な歩みを続けていたとするなら（そして、今もやはりそうであるなら）、おそらく、意識の構造層がどのような心理上の発達過程を辿って形成されるかを概念化する私の試みは、存在しなかったであろう。ともあれ、私は、まず最初に、それ自体としては何ら重大な問題を提出しているとは思えない、幼児と児童を対象とした発達心理学を研究しなければならなかった。そこで明らかになったのは、ウェルナー (H. Werner)、ピアジェ (J. Piaget)、コールバーグ (L. Kohlberg) 等の学者たち——つまりはそれに類するあらゆる構造主義者たち（かくいう私もその一員

であった)——の試みた仕事が、要するに、「発達をひとつの構造的展開とみる (development as structural unfolding)」立場を明確に打ち出して、これを厳密化するとともに、幼児期から青年期に到る発展コースの作図化を計るという2点に絞られることであった。けれども、私にとって、最初から興味のあったのは、これら個人主義的心理学者たち (personalist psychologists) の語らねばならなかった内容ばかりではない。神秘的伝統に立つ人たちの語らねばならなかった内容にも、さらには、両者をいかに折り合わせればよいのかにも、強い関心を抱いていた。この関心は、そもそもの初めから、とてつもない難問を私の上に負わせるに到った。

ここにいう難問とは他でもない、主体と客体の未分離状態をめぐって展開される難問であった。神秘的伝統に立つ人たちは、むしろ、早くからこう主張していた。われわれの到達すべき心的な究極の状態とは、主体と客体の融合した一の状態 (あるいは両者の2極分裂のない状態) のことであると。これこそは、究極的一の状態 (the state of ultimate wholeness) であり、ブラーフマンとアートマンがこの上ない形で一体化した状態 (the Supreme Identity of Brahman-Atman) である。ところで、西洋心理学のあらゆる (all) 学派は——クライン主義者 (Kleinians) も、フロイト主義者 (Freudians) も、ユング主義者 (Jungians) も、ピアジェも、フェアヴェアン (W. Fairbairn) も、マラーとカプラン (A. Mahrer and P. Kaplan) も、レーヴィンガー (J. Loevinger) もすべて——、実のところ、こう主張していた。幼児ないし新生児は、最初、主体と客体、自己と他者、内と外がまだひとつ (one) に留まっている未分化状態の内にあると。クライン (M. Klein) は、これを投影的自己同一化 (projective identification) と呼び、ピアジェは、原形質的意識 (protoplasmic consciousness) と名付けた。精神分析学に従うなら、これは、主体リビドーと客体リビドーの未分化状態 (ego-libido and object-libido undifferentiated) ということになる。けれども、ここにひとつの問題がある。この状態が、いやしくもあの究極的状态と同じく、主体と客体の合一した状態であるとするなら、それは、あの状態とどのような関係にあるのであろうか。

神秘的伝統に通暁した著者たちは、この胎児的状态について、大抵はこう考えた。それこそは、われわれの魂が外的世界とひとつになって存在する、あのユニオ・ミスティカ (unio mistica : 神秘合一) ないしサマディ (samadhi : 三昧) の、他でもない原初の姿の形跡なのだと。たとえば、ユング主義者はこう主張した。この世に生まれ落ちて最初の数ヶ月、われわれの自我は、いまだ完全に自己との同一化ないし融合を保っていると。ノーマン・オー・ブラウン (Norman O. Brown) の言によれば、主体と客体の融合したこの初期状態こそ、神秘的覚醒を経てわれわれが奪回できる、あの完全に非分裂な状態そのものということになる。これと本質的に類似した考えは、アラン・ワッツ (Alan Watts),

ジョセフ・キャンベル (Joseph Campbell), ルイース・カプラン (Louise Kaplan), プリンスとサベージ (R. Prince and Savage), アーサー・ケストラー (Arthur Koestler) 等によっても、はっきりと表明されていた。

明らかに一理があると思われた、こういった人たちの語るところを導きの糸として、私は、われわれの辿る内的発達的全行程を、新たに今一度概念化するという試みに着手した。その際、データ面では、発達心理学の主流とみられる学派の説くところに依拠するとともに、コンテキスト面では、超越個人的伝統に立つ人たちの言に頼ったことはいうまでもない。ところで、内的発達の行程そのものは、きわめてまっすぐ、かつ簡単であるように思われた。すなわち、新生児は「幼児的コスモス意識 (infantile cosmic consciousness)」の状態から出発する。これは、原初的一の状態 (a state of primary oneness or wholeness) である。彼にはしかし、この全一性 (wholeness) ははっきりと自覚できない。それは、(ユングの見解に従うなら) 自己との無意識的な合一の状態 (unconscious identification with Self) である。われわれの魂は、この全一性を自覚化するべく、まず第一に、この無意識的な合一の状態を放棄して、自らを孤立化させるとともに、分離され2極分化を被った世界を創出しなければならない。しかるのち (then), 魂ははじめて、自我に接近した形で、しかしながらこれと提携しこれを自己に再結合しながら、あくまでも意識的なあり方を保って、この全一性に還帰することができる。われわれの内的発達の全体過程は、このように、時間軸の最初に位置する、無意識レベルでの、超越個人的合一 (いわゆる「パラディシカル (paradisical)」な状態) から、意識レベルでの、個人的自己 (いわゆる分離され孤立化した状態) を経て、時間軸の最終に位置する、意識レベルでの、超越個人的合一 (はっきりと意識化された合一と至福の状態) に到る過程となる (the overall path of development was from an initial, unconscious transpersonal union, to a conscious personal self, to a final conscious transpersonal union)。

こういった見解の正しさを裏書きする証拠は、数多くみられると思われる。そういった証拠の数々に従って、私は、個人的領域と超越個人的領域の双方を、あくまでも発展的・力学的 (developmental and dynamic) 側面に重点を置きつつ、描き出し始めた。ここでは、構造的 (structural) 側面に重点を置いてこれらの領域を描き出すという、『The Spectrum Of Consciousness』で試みた方法は採らなかったのである。これらの領域での内的発達の諸相は、先に私が、その輪郭を描き出したような姿を示していた。私は、この力学に到りつくにあたり、ほぼ次のような道筋を辿ったのである。

魂の心的力学に強い関心を抱き、これを中心的に研究する心理学の主流学派としては、精神分析学を挙げないわけにはいかない。そういったわけで、私は、精神分析学が最初のヒントを与えてくれるであろうと期待した。この学派の内には、(フロイト (S. Freud))

からレーワルド (H. Loewald) に到る) 巨大ともいうべき理論と研究の集積がある。それらの示すところは、こうであった。われわれの内的発達にそれに従う基本的力学 (むしろ、これが力学のすべてではない) の中心にあるのは、母の胸中に抱かれていた折に (すなわち、両面価値を背負う以前の口唇期に) はっきりと味わわれていて、しかも、その後の発達の過程で奪い去られた、あのナルチス的快楽 (narcissistic pleasure) を再びおのれの掌中に奪回する企てであると。ブラウン (N.O. Brown) は、これを次のように記している。

フロイトの語るところに従えば、人間の自我感情は、かつては (すなわち、主体と客体の融合した新生児段階では)、世界の全体を自らの内に包括していた。それに基づいて今日、内なるエロスは、常に自我を駆りたてて、この時の感情を奪還するべく呼びかけてやまない。かくして、「われわれの自我の発達は、この原初的ナルチズムに訣別するところに端を発し、これを再び奪還しようと努める飽くことのない企てとして帰着する (The development of the ego consists in a departure from primal narcissism and results in a vigorous attempt to recover it)」。自己は、原初的ナルチズムの状態にあっては、愛と快楽に満ちた世界との一体的関係を保っている。それゆえ、孤立化した自我の究極に目ざすゴールは、「際限なきナルチズム (limitless narcissism)」とフロイトの名付けるこの原初状態を回復し、愛と快楽に満ちた全体世界との一体的関係の内にある自己を、今一度みい出すということになる。

以上の見解を、先に示した超越個人的な立場の見解に付け加えてみよう。すると、手に入るのは次のような見解であろう。すなわち、もし仮に、新生児段階での主体と客体の完全な融合といった原初の状態が、本当にそのまま、最初の一なる状態ないし自己同一の状態を指すとするなら、われわれの内的発達が目ざすべきゴールは、この自己合一の回復 (recover that Self-union) を措いて他にないと。ここで、「最高の自己 (the highest Self)」という用語に代わり、ヒンズー教での慣用語を用いるとするなら、われわれの内的発達の力学は、「アーツマンへの道 (Atman project)」として概念化されるであろう。この「アーツマンへの道」という言葉の内包はすべて、拙著『The Atman Project』の第一原稿に、すでに詳細に描き出しておいた。この原稿は、私が編集を担当していた『レ・ヴィジョン』に、当時、掲載が始められていたのである。

けれども、内的発達の概要について想いを巡らせば巡らすほど、何かがひどく誤っているように思われてならなかった。私は、これほどもしつように私を悩ませてやまないものは何かを見究めようとして、何度も、自らの執筆した内容を読み返した。お世辞でいうのではないが、個々の論拠はきわめて慎重に取り扱われており、それらの上に構築された私

の見解は、打ちくずすことなど到底おぼつかないように思われた。にもかかわらず、何か決定的に誤っているものがあつた。

こういった状況に思念を集中すればするほど、ますます、新生児段階でみられる主体と客体の完全に融合した原初的狀態，すなわち「幼兒的コスモス意識」に強く惹きつけられていった。そしてこう自問した。この狀態は、本当のところ、自己との無意識的同一を実現した狀態といつてよいのであろうか。それは、本当に、後には失われ（lost）しかるのちわれわれの手に取り戻されるべき、あの自己同一と同じものであつた（was）ののだろうか。超越個人的立場の權威者たちが、この問いに、たいていは「イエス（yes）」と答えていることはむろんよく知っていた。にもかかわらず、他でもないこの前提に、実は、問題の核心があつたのである。——とはいえ、具体的なデータの点で問題があつたわけではない（なぜなら、典型的な新生児段階における融合の狀態は、本当に存在するのだから）。そうではなくて、問題は、これらデータを解釈する權威者たちの解釈方法にあつたといいたいのだ（すなわち、この狀態は本当に（really）、自己と何らかの關係をもっているのかと問いたいわけである）。われわれの意識が一定の範圍をもつとするなら、——あるいは、ラブジョイ（Lovejoy）の言いまわしを借りて、「存在の偉大な連鎖（a Great Chain of Being）」が確在するなら——われわれの内的発達が、この連鎖に従いつつ、最も低い段階から最も高い段階に到る、移行の過程そのものであるという主張に何らの不都合もないであろう。けれども、問題がひとつあつた。（ノーマン・オー・ブラウン、ワッツ、ユング等にみられる）超越個人的な見解が、総じて、Uターン型（a type of U-turn）とでも名付けるべき仮定をはっきりと持っていたことである。このUターンは、しかも、偉大な連鎖の最終地点（the ends）においてではなく、まさにその中間地点（the middle）で生じるところに特徴があつた。まもなく説明するであろう諸々の理由から、私は、このUターンについて深く疑い始めた。のちに私は、最初の時点で探究の対象となることを逃れた、このUターンを新たに問題として取り上げたことが、明らかに失敗であつたことを知るであろう。

この時期は、私にとってはイバラの時期であつた。物的な面では、さまざまな事柄を清算しようと努めて頭が痛かつたし、知的な面では、あたかもギアの入らぬモーターを激しく空転させているような狀態に置かれていた。その際、手仕事というはっきりした接地点と、着実に坐禪をおこなう習慣をもたなかったならば、私の頭の止め金はここかしこではずれ、まさしく狂氣に陥っていたことであろう。一見したところ、発達のUターン現象をめぐるあらゆる証言が、一般的な超越個人的見解の側にかたまってみられたため、問題は複雑化されていた。加えて、系統発生と個体発生の間は何らかの相関が仮定されるなら、人類学的に研究された神話学すら、何ら助けとはならなかつた。というのも、神話学はわ



れわれに、あの「黄金時代 (a Golden Age)」, そこではすべてが一の状態を保って至福を味わい、アダムとイブの下降もそこから始まった「エデンの楽園 (a Garden of Eden)」ないし「パラダイス (a Paradise)」の神話が、あまねく人びとの間に存在することを語ってはいないだろうか。また、楽園ないしパラダイスからの「下降 (the Fall)」は、われわれのさかしらな知識、独立、エゴに基づく疎外等が原因となって引き起こされたのではなかったか。そして、こういった下降神話は、幼児の内的発達の行程にぴったりと符号しないだろうか。すなわち、原初の段階での一体化、次いで起こる分離、そのあとに起こる（内的覚醒を経た）一体化への還帰といった行程に (initial oneness, then separateness, then return to oneness)。

私は、『The Atman Project』の執筆を中断し、人類学と神話学を研究するべく方向を転じた。当初、さまざまな人の証言が、エデン神話の先にあげた解釈の正しさを確認するように思われた。レヴィ・ブリュール (Levy-Bruhl) と神秘的参入 (participation mystique) の観念、カッシーラ (E. Cassirer) と初期自然的同一化 (early naturic identity) の発想、ゲブサー (J. Gebser) と古代的全一 (archaic wholeness) の状態等がそれである。けれども、実際の証拠を調べれば調べるほど、ひとつの点がますます目につき始めた。他でもない、系統発生的にみても個体発生的にみても、初期の人間には、「天上的 (heavenly)」と呼んでよい類いのものは何ひとつ備わっていなかったことである。なるほど、彼らの状態は、パラダイスの (paradisical) と呼ばれてしかるべきものであったかもしれない。けれども、それは、英知の輝きを欠いた、無知の支配するパラダイス (a paradise of ignorance, not wisdom) であった。ここには、超越個人的 (transpersonal) な要素は一片としてみられない。これこそは、正真正銘の前個人的 (prepersonal) な状態であった。

私の求めていた手掛りないし突破口は、実はここにあった。エデン神話では、前個人的な無知と超越個人的な至福が、混同して理解されていたからである (the Eden myths confused prepersonal ignorance with transpersonal bliss)。その結果、アダムとイブが進化して、最終的にエデンの楽園をあとにした時、これが誤って解釈され、天上的至福からの下降 (a Fall down from heaven) とみなされたわけである。アダムとイブの子孫であるわれわれは、今や、天国から（あるいは神との一体化、神としての一体性から）下降した状態にある。とはいえ、それは、歴史的時間の内における下降ではない。万物がそこから現われ出る、永遠の今における下降である。われわれは、今という瞬間ごとに天国的一の状態から落下する。そして、常にさまざまな境界ないし制限を自らに設けて、これを固く抱きしめつつ、切り離された自己という実感を伴って生を送る。ところで、神学者や神話学者のグループは、歴史的時間の内における下降と永遠の今におけるそれを混同し

(confused these two falls), そこから、超越個人的な地上天国は、歴史的時間の内における現実の過去の内に存在するなどといった考えを導き出したのである。けれども、ホモ・サピエンスとしての人類に先行して在ったのは、超越個人的な魂 (transpersonal souls) ではない。前個人的なサル (prepersonal apes) であった。神話に登場するエデンの楽園とは、端的に言って、個体発生的には、われわれの内的進化における、潜在意識的、前個人的、前自我的、下人間的な諸々の段階を指すものに他ならなかった。また、系統発生的には、(オーストラロ・ピテクス (Australopithecus) やホモ・ハビリス (Homo habilis) 等の) 初期人類ないし原人類の段階にまで及び、それらをも含む内容を示していた。そういったわけで、この段階は、未熟な形においてはあっても、一応パラダイス的と呼ばれてよいものであった。なぜなら、原人類の場合、いまだ前自我的な段階に留まっていたため、自らを省みて深く反省する自省の力を欠いており、それゆえ、現実の不安、懷疑、絶望をまさに不安、懷疑、絶望として感じ取る感受の力を欠いていたからである。

#### ＜意識の諸段階＞

こういったわけで、エデン神話は、潜在意識から (from) 自己意識にいたる (to) 歴史的経移がどういったものか、また、結果としてそこに含まれてこざるをえないわれわれの罪責観念と不安観念がどのようなものかを、語り明かしてくれる。現に私は、この移行に際してみられる、古代的 (the archaic)、魔術的 (the magical)、神話的 (the mythical)、合理的 (the rational) といった4つの主要な段階を、くっきりと描き出すことに成功した。これらの段階は、私の試みるあらゆる説明を、L. L. ホワイト (L. L. Whyte)、ジャン・ゲブサー (Jean Gebser)、エーリッヒ・ニューマン (Erich Neumann)、ジュリアン・ジェイネス (Julian Jaynes) 等の学者たちが行った歴史的業績にぴったりと一致させる上で、多大の貢献をみせた。私が最終的に明らかにしたかったのは、他でもない、もしもわれわれの内的進化が、潜在意識から自己意識へといったコースを辿るとするなら、それがさらに、自己意識から超意識 (superconsciousness) へといったコースを辿ってはいけない謂れはないという点であった。しかも、前個人的な段階から個人的段階を経て超越個人的な段階にいたる3つの一般的段階ないし局面は、アウロヴィンド (Aurobindo)、ヴェルディヤエヴ (N. Berdyaev)、ティヤール・ド・シャルダン (Teilhard de Chardin)、さらに最も重要なことにはゲオルグ・ヘーゲル (Georg Hegel) の説くところとも完全に一致していた。私は、今一度ヘーゲルを深くかつ慎重に研究するべく、彼の元に引き返し、西欧世界のいかなる哲学者からも得たことのない強い印象を受け取ったのち、彼の元から還帰した。そうこうする中で、私は、これらの成果を

とりまとめて、一冊の書物を著わした。『Up from Eden (エデン神話を下にして)』がそれである。

『Up from Eden』において詳細に展開した人類学的かつ進化論的な研究は、さらに、『The Spectrum Of Consciousness』で明らかにされたわれわれの内界地図のもつ若干の空隙を埋める上に、多大の貢献をみせた。というのも、『The Spectrum Of Consciousness』では、存在の最も低位に属する諸段階、具体的には、物質、植物、爬虫類、哺乳類等のいわゆる前人間的ないし下人間的 (subhuman) な存在の段階は、ほとんど注意が払われていなかったからである。代りに、そこでの内界地図は、(ペルソナ段階、エゴ段階、ケンタウロス段階といった) 自己意識の諸々の段階から始まり、(超越個人的段階、全一的 (universal) 段階といった) 超意識の段階の数々にまで及んでいた。これらの段階は、むろん今でも十分な妥当性を有しているが、私はさらに、潜在意識的な領域に属する諸々の段階をも、これにはっきりと付け加えることができたのである。物質的段階 (あるいはプレローマ段階)、植物および下等動物的段階 (あるいはウロボロス段階)、高等哺乳動物的段階 (あるいはティポーン段階) がそれである。同時に、超越個人的な領域をさらに4つの一般的段階に細分して、プシュケー段階 (悉地的悟り (siddhi : シッディー) や超感覚的知覚 (psi : プシー) の属する領域)、名状不能の霊妙段階 (各種のアルケー・タイプ (arche-types) や個人的神性 (personal Deity) の住まう領域)、元原因的段階 (未発の空ないし無 (unmanifest Void) の領域)、究極絶対の段階 (神霊 (spirit)、生得的三昧境 (turiya : トゥリィヤ)、法身 (Svabhavikakaya : スヴァーバヴィカカヤ) の名をもつ領域) とし、超越個人的な領域に関する私の理解をより明瞭なものとした。こうして、さらに完全な意識の境界地図、さらに完全な「存在の偉大な連鎖」ができた。すなわち、物質的プレローマ (matter-pleroma) 段階、爬虫類的ウロボロス (reptile-uroboros) 段階、哺乳類的ソーマ (mammal-body) 段階、ペルソナ (persona) 段階、エゴ (ego) 段階、ケンタウロス (centaur) 段階、プシュケー (psychic) 段階、霊妙 (subtle) 段階、元原因 (causal) 段階、究極 (ultimate) 段階の合計10に及ぶ局面である。西洋神学の短縮法を用いるなら、これは、物性 (matter)、身性 (body)、心性 (mind)、魂性 (soul)、霊性 (spirit) の5段階として表現される。

かくして、進化の要点は、アウロビンド、ティヤール・ド・シャルダン、ヘーゲルの指摘にもあるように、それが、存在の最も低位の環から出発して最も高位の環にいたる、あの「偉大な連鎖」をき<sup>〇</sup>ち<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>と辿ることにある。以上の事実を明らかにしたのち、私は、再び『The Atman Project』の執筆に取りかかった。今や、あれほども私を悩ませ苦悶の極に陥れていた、内的発達をめぐる諸問題が、完全に透明体と化したように思われた。というのも、成長とか発達と一般に名付けられているものは、実のところ、巨大な自然進

化ないし宇宙進化の人間面での表出 (the expression in humans) に他ならないからである。アメーバからホモ・サピエンスを創り出した同じ「力 (force)」が、幼児を成人にもたらし過程にも働いている。両者にみられる創造の過程は、本質的に類似しているのだ。個体発生は、宇宙進化と系統発生をその要点においてくり返す (ontogeny does recapitulate cosmogony and phylogeny) といった指摘は、少くとも、その輪郭をきわめて広くとる場合、あくまでも真実なのである。

個体発生についての以上の説は、ピアジェの一節を通し、きわめて力強くその妥当性を訴えた。ピアジェは、幼児の一番初めの頃 (かつて私をあれほどの混乱に陥れた、新生児段階での主客融合の状態、あるいは投影的自己同一の状態) を記述して、こう語っていた。「ここでは、自己はいまだ物性の状態 (material) におかれている」と。これを目にするや、直ちに、全体図が明らかとなった。初期段階における主客融合の状態、すなわち、フロイトからユングさらにはブラウンに到るすべての学者が、「愛と快感に満たされつつ、全体世界との一体性を強く味わっている (oneness with the whole world in love and pleasure)」と考えた新生児の状態は、実のところ、偉大な連鎖のうち最も低位の段階との一体化であった。それは、とりわけ物体的段階 (そして、母親を媒体とした生物学的段階) との一体化であった。かくして、幼児は「全体世界と一体化している (one with the whole world)」ということはできない。まず第一に、彼はいまだ心的世界 (mental world) と一体ではない。さらに、社会的世界 (social world) と、あの霊妙な世界 (subtle world) と、シンボルの世界 (symbolic world) と、言語の世界 (linguistic world) とも一体化していない。幼児においては、こういった世界はいまだ出現をみておらず、まさに非存在という他ないからである。ゆえに、こういった段階との一体化もありえない。幼児は、これらについては完全に無知の状態にある。彼の基本的に一体化する対象、基本的に融合する対象は他でもない、物体的な環境世界 (material environment) と生物学的な意味での母親 (biological mother) だけなのだ。幼児では、自らの物体的肉体を、物体的な外的環境から区別することはできない。それよりも高次の存在は、ひとつとして原初的な主客融合の内に入ってはこない。(それゆえ私は、同じ事柄が、人類学的にみてホモ・サピエンスの黎明状態にも当てはまることを示したのである。黎明期の人類は、事実、世界との神秘的つながりを自覚しつつ、アルカイックな一体感の中で生きていた。とはいえそれは、偉大な連鎖のうち最も低位の存在にしか与らないところの、物体的 (material) 段階・動物的 (animal) 段階との一体化であった。彼らのトーテム崇拝はここに由来する。)

かくして、初期的な融合の状態に「全体世界 (whole world) との一体化」などといった表現が用いられるなら、しかも、この「全体世界」によって原初期にみられる物体的段

階との融合以外の融合が意味されているなら、われわれは、大きな誤まりを犯していることになる。加えて、原初期における物体的段階との融合は、単純に、拡大された自己あるいは自己同一化 (Self-identity) と同等視されえない。そこで、初期状態こそは自己との真の一体化であり、内的発達過程で必然的に喪失され、われわれの内的覚醒 (enlightenment) を経て新たに獲得される当の一体化であるといった、超越個人的分野での一般見解は、あくまでも取り上げておく必要のある問題としてあった。なぜなら、自己とは心理学的な諸構造の統体に他ならず、断じて、諸構造のひとつにすぎない最も低位の存在に限られるものではない (the Self is the totality of psychological structures, not the lowest psychological structure) からである。こういった統体は、幼児期にはいまだ顕現をみせていなかった。それゆえ、ポテンシャルな形において存在するもの (a potential) との一体化など、およそ不可能という他はない。(あるいは、上の見解を比喩的なものと解釈すればどうか。その場合にもやはり、さまざまの存在はすべて (all), 内的覚醒に先立って、無意識の形においてにせよ、自己との一体化を達成しているという点を認めないわけにはいかない。そうだとすれば、この種の一体化が内的発達のプロセスにおいて喪失されるというのは、ナンセンス以外のなにものでもない。こうして、いずれの場合にも、上の見解は誤りであるということになる)。

今や、その後の内的発達過程で失なわれるものの正体がはっきりした。それは、潜在意識的で前個人的な、あの物体段階との融合において味わわれる、比較的心地のよい無知の至福であった。幼児は、物体的なウロボロス段階との生来の同一化——断じて、自己との同一化ではない——を碎き破るのである。ところで、前個人的な領域と超越個人的な領域は、現実には、幼稚園や保育園等のプレ学校段階と、大学院等のポスト学校段階の間に認められる程の差異を有しているにもかかわらず、それぞれの仕方、ともに個人的な領域とは異っていることから、一見したところ、同一物ではないかといった印象を与える。だが、この混同がひとたび生じるや、そこではともに、前個人的で潜在意識的な形の融合が事実上失われていることも手伝って、失なわれたのは超越個人的な合一であったという、明らかに誤った見解が現われ出ることになる。表現をかえれば、前個人的な領域を超越個人的な領域と混同するという誤り (pre / trans fallacy) は、われわれの内的発達が、現実には、無意識的な前個人的段階から個人的段階を経て超越個人的段階に到るコースを辿っているにもかかわらず、それが、無意識的な超越個人的段階から個人的段階を経て、意識的な超越個人的段階に到るコースを辿っているといった見解を生み出すのである。すなわち、前個人的段階から個人的段階を経て超越個人的段階に到る (prepersonal to personal to transpersonal) という直線型の発達に代って、超越個人的段階から個人段階を経て元の超越個人的段階に到る (transpersonal to personal back to transpersonal) という

Uターン型の発達経路が導き出された根本の原因は、前個人的な段階と超越個人的な段階のもつ相違点をはっきりと把握できないことにある。

以上の事柄はすべて、些細なものに思われるかもしれない。けれども、それは、人間の内的発達をいっそう適切に概念化する上に、さらには、進化論に、存在の偉大な連鎖に、ヘーゲルやアウロビンドの語るところに、人間の内的発達を調和させる上に、なくてはならない私の考えた相違点であった。かくして、私は、『The Atman Project』の執筆に帰っていった。そして、潜在意識から自己意識を経て超意識にいたる、われわれの内的発達が辿る諸々の段階を、それらが有する役割、可能性、葛藤とともに、構造化して描き出すことに成功した。『The Atman Project』では、全部で20に及ぶ内的発達の段階ないし局面について、その輪郭を描き出したのであるが、ここでは、便宜上、物性→身性→心性→魂性→霊性といった、西洋神秘学で用いられるもっと簡単な段階区分を用いてもさしつかえあるまい。肝心なのは、内的発達と呼んでいるものが、上に示した各段階を順番に辿り登っていく力学的プロセスであること (a dynamic process of hierarchically moving through those stages)、その際、意識の各段階は、次にくる段階の基底的支柱となること等であるからである。(これは、『Up from Eden』に紹介した「混成的独立 (compound individuality)」の考えに他ならない。各人は、海に浮かぶ島々のような単一の独立存在ではない。むしろ、先立って在るすべての進化ないし発達の段階を、自らの構成要素としてもつ複合体であるといった方が正しい。諸々の段階は、各人の混成的独立を構成する個々の段階ないし要素として、今なお生き続けて、自らの要求を表明するとともに、自らに相応した外的環境中の各段階とやり取りを交して、自らの生存を再生している)。

自分でいうのもおこがましいが、今や、意識の諸構造がいかにあるか、また、それら構造の内的発達がどのような行程を辿るかについて、私は、かなり正確な全体図を所持していた。私の関心は今一度、意識の力学にふり向けられた。すでに、(前に記述した力学も含めて) 意識の力学に属する全観念の再吟味をはじめていたので、どうして以前には、幼児が「完璧な全体性 (perfect wholeness)」の内にあるといった考えの受け容れをあれほどもしぶったかの理由が、今やはっきりと理解できた。永遠を志向する哲学の一派や超越個人的な伝統に属する人たちは、口をそろえてこう主張している。われわれの進化と発達を貫いてある「力学 (dynamic)」ないし「力 (force)」とは何か。自己の最究極のポテンシャル、つまりは超意識 (あるいは仏性 (Buddha-nature)、アトマン本性 (Atman-nature)、大霊 (Spirit)、神意識 (God-consciousness) 等、いかなる表現を用いてもよいが) の顕在化をはかる抗しがたい内的衝動がそれであると。私は、幼児の段階にみられる主客融合の状態を、無意識的な形におけるこの種の究極的合一であると主張すること

で、実は、それに続く内的発達をすべて、アトマン意識を再び入手しようとはかる飽くことのない試み (an attempt to regain Atman-consciousness) であると主張することができた。その際、何らテロスの観念に訴えることなく、これをなしおえたのである (and I could do it without having to invoke the notion of telos)。最究極の合一は、幼児の内的発達の中にすでに存在してみられたので、私は、これが実際に歴史の内に顕在化した状態を、過去の中に指摘することができた。次いで私は、この顕在化の状態を吟味して、必要とされる力学をいともたやすく引き出すことができた。その際、いかなるテロスの観念も必要とはしなかった。

### ＜テロスの観念＞

テロスという観念の導入をしぶったのは、単に、この観念が正統派の心理学者たちの間に、すぐさま拒否反応を引き起すであろうといった理由からばかりではない。さらに、——たとえ私が、超越個人的な心理学者に属して、正統派からみれば、それだけですでに、完全に前衛的でオカルト的な、つまりは充分にうす気味の悪い存在であったにせよ——そういった私にとってすら、この観念は、あまりにも不自然でこじつけ的なものと映ったからである。とはいえ、現実の証拠はすべて、誤る余地がないほどにはっきりと、この観念の確在する事実を示していた。

言葉をかえるなら、意識の力学を司どる法則としてわれわれは、単に、過去からの押力 (a push from the actual past) のみでなく、未来の状態の顕在化をはかる駆動力 (a drive to actualize a future condition) をも、それに数え入れるのが妥当といえる。われわれの意識は、正統派の心理学者たちの主張するように、ただ単に条件付けられたもの (just conditioning) ではない。それは、創造的な現出と目的への志向性 (creative emergence and teleological striving) を、自らの特性として有している。とはいえ、こういった特性は、条件付けに用いられる強化理論を用いたのでは、筋の通った説明をほどこされえない。あるいは、次のように言うこともできる。条件付けの理論は、或る傾向について、それが最初に現われてのち、いかに強化されていくかを説明はできるものの、最初の現われがいかにして生じるかを説明することはできない (Conditioning theory can explain the reinforcement of a tendency after it first emerges, but it cannot explain the initial emergence itself) と。この理論は、或る種の行動が何故くり返されるかを、また、その行動が何故2度目も生じるかを説明はできても、その行動が一度目に現われたのは何故かを説明することはできない。しかるに、あらゆる新奇さ、あらゆる創造性、あらゆる成長、あらゆる発達が含み込まれてみられるのは、行為のまさに最初の現われにおいてなのである。換言するなら、創造的な局面あるいは目的論的な局面こそ、

われわれの行動における最も重要な局面といえる (The most important aspects of behavior, in other words, are creative and / or teleological)。けれども、こういった局面は、単に過去のみによって、十分にはいや優勢的にすら区画されえない。それは、むしろ、いまだ顕在化していない各種ポテンシャル——簡単にはテロス——に向っての創造的な諸傾向を映し出しているのである。

ともあれ、テロスの観念を用いることに覚えた内心のひそかな恥じらいは、ヘーゲル、アリストテレス、アウロピンド等の思想を研究したのちは、きれいさっぱり消失した。単に、テロスの観念が受け入れ可能となったばかりではなかった。さらには、正統派の心理学がこれを厳しく排斥し、過去の時点における条件付けとその強化に関する理論にひたすらすがりついた結果、極度に決定論的で還元論的な、しかも自己矛盾に満ちた理論——この理論は、幸いにも、これまでのところ、理論的な挑戦を受けないできた（今日でもやはり、そういった挑戦を受けないでいる）——の辿らざるをえない知的破滅を、現実には味わっている事実をはっきりと理解しはじめることができたのである。こういった学習—強化理論への致命的ともいえる批判が、ホワイトヘッド (A.N. Whitehead)、ヘーゲル、グレゴリー・ベートゥソン (Gregory Bateson)、ハートショーン (C. Hartshorne)、ハストン・スミス (Huston Smith) 等の哲学者によって、近年、ますます発展をみているにもかかわらず、当の心理学者たちは、依然として、大抵はこういった批判を知らないでいる。正統派と称する心理学者たちは、大抵、自分こそは正真正銘の経験科学の徒 (empirical scientists) であるといった妄想にとらわれているため、自分には、哲学を無視してよい権利が備わっているなど考えるけれども、彼らが「経験的—分析的な心理学 (empirical-analytical psychology)」と称する当の学問も、実は、隠れた形而上学と勝手な認識論的仮設 (hidden metaphysics and arbitrary epistemic assumptions) に基づいて構築された、幅広い体系に支えられているのである。現実には強い拘束力を発揮しているにもかかわらず、当の本体は何ら気付かれていないといった隠れた形而上学は、(われわれを突き動かす無意識の動機が、時として、病理的なものであるのと同様) 悪しき形而上学という他はない。「私は科学者なのだから、思弁哲学を必要としない (I'm a scientist, I don't need speculative philosophy)」といった発言は、それ自体がすでに、論理実証主義とプラグマティズムに属する哲学者の言、それも、明らかに2級ないし3級の哲学者の言である。

テロスの観念を導入するというこのハードルをいかに越えるか。これが、意識の力学をまとまった形に概念化しようと努める私の前に、はっきりと提示された最後の大きな障害であった。私は、テロスの観念——わけでもアトマンというテロス (Atman-telos)、あるいは、大神霊の顕在化に努める根源的な衝動 (the drive to actualize Spirit)——



を受け入れた上で、内的発達各段階に認められる諸々の動機を、(ホワイト (L.L. Whyte), アサギオーリ (R. Assagioli), プリゴーギン (Prigogine), アルバート・ツェント・ギョルギー (Albert Szent-Gyorgyi), フーラー (Fuller), ファンタッピー (Fantappie), ヘーゲル等もそうしたように) 大いなる全一を志向する根源的衝動が、さまざまな下部段階に姿を現わしたものである (subsets of this ultimate drive to Unity) と捉え、これらの動機を今一度吟味した。すると、内的発達の全体図は、おおよそ次のようなものとなった。各人は、発達の段階ごとに、そこでの全一性を強く志向する。けれども、さらに高次の全一性を発見するべく、彼は、低次の全一性を絶えず放棄しなければならない。ここにみられる放棄と発見の循環的なプロセスは、唯一絶対の大いなる全一に到るまでやむことがない (the individual seeks unity at each stage of growth, but he or she must continually give up the lower forms of unity so as to discover higher unities, a process that continues until there is only Unity) と。簡単な実例を用いるなら、こういうことができる。われわれは、まず、食物による一体化 (すなわち、食べることによる共同といった口部段階) とセックスによる一体化 (すなわち、生物学的結合といったファリックないしエディプス段階) を越え出た上で、さらに上位の、精神的・社会的な相互作用による一体化 (すなわち、共同体といった精神段階) を見い出さなければならない。次いで、こういった精神的自我をもさらに越え出て、より上位に位置する各種の段階を発見しつつ、ついには、大いなる全一そのもの (すなわち、唯一絶対の大神を対象とした神的合体 (divine communion in only God) といった超越個人段階) にまで到らなくてはならないと。この場合、各段階はそれぞれに、一步下の段階に対し、いっそう高次でいっそう包括的な全一性を示している。そして、内的発達はもっぱらに、唯一絶対の大いなる全一に到るまでやむことがない。われわれの魂は、内的発達の行程全体のテロスとなす、大いなる根源かつ究極に支えられて存在する。ヘーゲルでは、これが次のように表現されている。

「(絶対的なものとは) 生成のプロセスをいう。それは、その終り (end) がその目ざすところ (つまりはテロス) であり、その終りがその始まりでもあるひとつの輪 (the circle) ということができる。このプロセスは、発達 (development) を通してのみ、終り (end) への到達を通してのみ、具体化し顕在化する」と。

#### ＜究極意識としてのアートマン＞

さて、われわれの内的発達を統括する一般的力学は、私がはじめに考えていたのと何ら異ったものではなかったことに注意してほしい。それは、アートマン意識を志向する根源的衝動であり、「当の終局点をおのれが目ざすところとして想定する一個の輪 (the circle

which presupposes its end as its purpose)」であった。とはいえ、このゴールを、幼児段階における主客融合的状态（あるいは、この状態の「成熟版（mature version）」）の単なる回復（recovery）として概念化することは、今やできなかった。それは、われわれの目ざすべきテロスが、すべての人の究極的状态であると同時に、その根源的ポテンシャルでもあるアートマンの状態に他ならない事実に見覚めること（discovery）として概念化された。（ところで、上にみた表現、あるいは下に示す類いの表現は、一種のパラドックスないし逆説である。すなわち、アートマンは、あなたの現時点における本質であると同時に、あなたの発達の終局点における帰結でもある：アートマンは、進化の全段階が目ざすべきゴールであると同時に、各段階の現時点における具体的状態でもある：アートマンは、われわれの発達が辿るハシゴの最高段であると同時に、ハシゴ全体が造られている木材でもある：大神霊が、今ここに顕在体としてみられるなら、まさに今、その光に照らし出されることは可能であろうし、それが今、ゴールとしてあるのみならば、むろん遍在してあることはできない——それゆえ、大神霊はゴールであると同時に、現時点での現われでもある、つまりは「それ自身の生成のプロセス（the process of its own becoming）」に他ならない：）

内的発達を統括する一般的力学の場合にみられたのと同様、内的覚醒を通して私に啓示された内容の場合にも、そのエッセンスは、私がはじめに考えていたところ——すなわち、アприオリな状態の回復（recovery）ないしは再発見——と何ら異なるところはなかった。けれども、アприオリな状態として再発見されたのは、時間の点ですべてに先行する（prior in time）、新生児段階での主客融合の状態ではなく、深さの点ですべてに優先する（prior in depth）、究極的なアートマンの状態であった。アートマンとの合一においても、当の合一は、本質的には再合一（re-union）の形をとる。けれども、それは、時間の内に位置を占める特定の状態との再合一ではない。まさに、時間に先行してある特定の状態との再合一なのである。——ここにいう特定の状態は、事実、時間そのもの、空間そのもの、自己そのもの、欲求そのもの、記憶そのもの、分離そのもの、可死性そのもの、自己同一化そのもの、心そのもの、身体そのもの、世界そのものに先行した状態（prior, in fact, to time, space, self, desire, memory, separation, mortality, identity, mind, body, and world）として記述される。ではなぜ、これが再合一と呼ばれるのか。われわれは、絶えず、諸々の制約を、自己を、分離を、受苦を強く握りしめるあまり、それらに拘泥して、すべてに先行してある大いなるアートマン状態を、捨て去り忘れ去っている（abandoning）からである。発達とは、こういった忘失ないし捨象に先立って、われわれが常にかつ既にそれであるところのものに還帰することに他ならない（development is simply a return to that which we always already are prior to that abandon-

ment)。それは、端的にいうなら、アートマン意識を再度獲得しようとする一個の企て (an attempt to regain Atman consciousness) である。(この企ては、ところで、進行速度が鈍いとともに、道筋も曲りくねっていて、さまざまの補償 (compensations), 防御 (defenses), 代用満足 (substitute gratifications), 前進 (advances), 後退 (retreats) 等で彩られている。——<sup>○</sup>そこ<sup>○</sup>に<sup>○</sup> (there) みられるのは、複雑な発達のアマルガムなのである)。

最後に、アートマン的全一の再発見へとわれわれを駆りたてる根源衝動は、(きわめて多くの理論家たちがそう考えているにもかかわらず) 新生児段階における主客融合の状態に帰りつくことを願う欲求と、何ら関わりをもたない (has nothing to do with) ことを銘記してほしい。後者の欲求は、実のところ、退歩ないしはナルチスト的自己陶醉に備わる吸引力にすぎない。それは、いっそう高次の発達を迎え入れるにあたり、われわれが、くり返し克服しなければならない退歩的吸引力 (a regressive pull) なのである。事実、成人にいたる過程で、初期段階におけるナルチスト的融合を首尾よく脱却しえない場合、われわれは、(たとえば1979年、クリストファー・ラッシュ (Christopher Lasch) が記載したように) 前個人的段階に固着して、これをいつまでも追求め、下人間的段階に属する諸々の傾向をいつまでも捨て切れずにいる。前個人的段階へのこういった固着は、明らかに、超越個人的傾向の顕在化とは何の関わりももたない。後者は、進化ないし進歩の方向に沿った動きであるのに対し、前者は、退化ないし退歩の方向に沿った動きであるからである (The latter is evolutionary or progressive; the former is involuntary or regressive)。

前個人的段階から超越個人的段階へといった強調点の移行は、同時に、発達自体のとり様式 (form) をいっそう適切な形に概念化したいという私の試みに対して、大いに貢献するところとなった。発達の様式は、以下のように記述されたからである。われわれの自己は、継続した過程である成長と発達の各段階において、まず所与の段階から自らを<sup>○</sup>分化<sup>○</sup>し (differentiates), その段階を超越して、次に続くいっそう高次の段階へと向ったのち、これらを統合して一体とする (integrates) と。継続した過程を形成するおのこの発達段階は、それゆえ、自らに先行する各段階を超越しつつも、それらを内に含み込むというあり方を保っている。ヘーゲルも、「取って代る (to supersede) とはどういうことか」について、こう語っている。「それは、当のものを否定しつつも、他方、それを内に保持すること (at once to negate and to preserve) である」と。われわれの発達は、物体 → 身体 → 心体 → 魂体 → 霊体といった上昇の行程を辿るのであるから、高次の各段階は、自らに先行する各段階を一方では否定しつつも (すなわち超越しつつも)、他方ではそういった先行の段階を、いっそう高次の秩序的合一ないしは総合の中にはっきりと保

持して（すなわち含み込んで）いる。こういったプロセスは、唯一絶対の究極的合一にいたるまで途断えることがない。終局点でのファイナルな超越とは、それゆえ、終局点でのファイナルな総合に他ならない（The final transcendence is the final synthesis）。

以上の図式は、こちらの病理学を理解する上に、とりわけ有益であった。たとえば、フロイトの為した重要な発見は、次のように記述されるであろう。われわれに現われる各種の情緒的な兆し（emotional symptoms）は、しばしば考えられたように、何ら意味をもたないもの、あるいはナンセンスの部類に属するものではない。むしろ、固有の原因をはっきりともった、それゆえ意味のある存在である。しかも、それらの原因はすべて、各人の現実の個人史の内に（in the actual history of the individual）、はっきりとその根をもっている。ここから、もしも各人が、個人史の忘れ去られた部分を再構成（すなわち想起）できるなら、兆しの意味するところは透明となって、それが意識に対してもつ強迫的な握力（obsessive grip）も、存在の意義を失って消失せざるをえないというメカニズムが導き出される。簡単にいうなら、兆しのもつ意味は、「各人の個人史にその原因を問う（causes in history）」ことによって発見が可能であり、そこから、治療上、個人史の忘れ去られた部分にメスを入れ、これを再発見することによって、この部分の不透明さに起因する兆候の除去も可能となる。

ところで、「各人の個人史に問われてしかるべき原因（causes in history）」とは、今や、「各人の内的発達のプロセスに生起する出来事（events in development）」を意味することになる。われわれに現われる情緒的疾患の大半は、われわれの内的な発達の不全（developmental abortions）に起因するといえる。——そういった疾患は、大半が、従事されなかったり完遂されなかった、発達上の働きに由来している。そこでは、経験の諸段階が、はなはだしく固着された形にあるか、あるいは、はなはだしく疎外された形にある。結果として、次に続く高次の段階が現われた場合にも、低次の段階は、これに統合されないで、隔離的な状態を保ち続ける。そこに見られるのは、分化（differentiation）ではなくて分離（dissociation）、超越（transcendence）ではなくて抑圧（repression）である。こういった分離と孤立は、統合の失敗を顕わす証拠ともいうべき、さまざまな病理的兆候や情緒的混乱に出現の機会を与えずにはおかない。発達の各段階における失敗は、その後の運命の因果律を、つまりは、各種の兆候・夢・主観の投出（projections）として現われる、「抑圧された者に特有の退行的現象（return of the repressed）」を、作動に導く引き金の役割を果たす。むろん、これのみが、病理を司る唯一（only）の原因というわけではない（目的論的にいうなら、これは、未来を現時点でのポテンシャルの表出と統合すべき作業における失敗現象なのである）。とはいえ、唯一の原因ではないにしても、これが、各種の内的混乱の中心的（central）原因であることだけは確かである。

さて、物体→身体→心体→魂体→霊体といったプロセスを辿るわれわれの内的発達が、多少とも順調に歩を進めるとするなら、1歳から2歳にいたる間に、第一の段階としてあった初期の物体的自己は、第2の段階としての身体的自己に道を譲ることであろう。次いで、4歳から7歳にいたる間に、第3の段階としての心体的自己が姿を現わして、(前の場合に、身体的自己が、物体的融合からの分化をはかったのと同様)身体的自己からの分化を計ることであろう。けれども、こういった期間に、(精神的外傷(trauma)や2重の拘束(double-bind)といった)発達の上での過酷な災厄がくり返し生じるなら、心体的自己は、肉体的自己からの分化をそれほど容易には達成しがたいであろう。心体は、身体からの分離といった状態を保つであろう。心体と身体との分離といった状態は、状況に応じて、さまざまな跳ね返り現象(several repercussions)を示し出す。極端な場合には、レイング(R.D. Laing)が「偽りの自己(the false self)」と名付けたものが生み出される。この場合、各人は、心体を自己として、身体を他者として体験する。これは、(レイングによれば)精神分裂症に特有の、分裂症的混乱の根底にみられる症候である。(時としてこれは、物体的融合から身体的自己にいたる、移行の初期段階で生じる多相の精神的外傷、すなわちマルチトラウマ(multitraumas)と混ぜ合わされて存在する)。これほど極端でない場合には、フロイトの記述したさまざまな形の抑圧(つまりは、われわれの心的防衛)——より具体的には、身体的欲望や快楽に対して、心体的自我ないし超自我の試みる各種の抑圧——が生み出される。最も穏やかな場合には、西欧人の典型ともいえる人たちの内に特徴的に認められる、伶俐で抽象的な、感情や情緒を極度に嫌う心的あり方が生み出される。(L.L. ホワイトが、1950年、心体と身体との亀裂を、「ヨーロッパ型の分離(the European dissociation)」と名付けたのも驚くにはあたるまい)。

以上に示した理解の様式は、また、フロイト主義の柱石ともいえるべき、エディプス・コンプレックス(the Oedipus complex)を解明する上に光を投ずるように思われた。以上の主題に取り組んだ当初、私には、精神分析学は全体として、中でもエディプス・コンプレックスはとりわけ、あらゆる心理学的な理論の内でも、最も滑稽かつ愚かしいものに思われた。けれども、再三にわたって、(完全に私の意に反して、それも全く腹の立つことにも)私は、(少くとも、ウロボロスの段階、ティポーンの段階、情緒的段階といった、いわゆる身体的段階のすべてにわたって、ということは、より低次の段階に関する限り)フロイトの示した天才的洞察の正しさを確認する破目におちいった。とはいえ、こういった段階を越えた地点では、私は、むろんフロイトの徒(fan of Freud)ではない。ともあれ、私は、これら低次の段階においても、全くその必要がなかったにもかかわらず、フロイト以上の天才を空しく探し回っていたのである。その結果、おそらくは西洋史上もっとも偉大な心理学者といってよいフロイトが、エディプス・コンプレックスないしはその

裏返しとしてのエレクトラ・コンプレックス (Electra complex) を、われわれの心的機構における核的存在とみなしていた事実、少なからず感銘を受けるに至った。フロイト理論には、一見したところどれほど異様にみえようとも、あるきわめて重要な真理がはっきりと含まれていたからである。

研究を深めれば深めるほど、この真理の真理性は、いっそう明らかになるように思われた。というのも、エディプス・コンプレックスのエディプス・コンプレックスたるゆえんは、それが、われわれの身体的次元に属する情緒的・性的な欲望から、心体的な自己同一化にいたる移行を（すなわち、「ものの選択に自己同一化が取って代る (identifications replace object choices)」ことを）画するという点に求められるからである。エディプス・コンプレックスを、今、物体→身体→心体→魂体→霊体といったコースを辿る、内的発達の全体過程の内に位置づけるなら、それは、心体が身体から分化する地点、あるいは身体から心体への移行の地点 (the differentiation and transition point from body to mind) に位置づけられるであろう。エディプス・コンプレックスは、このように、 $\text{身体} \xrightarrow{\text{通}} \text{一体化の志向}$ （すなわち、情緒的・性的な交わり）から、 $\text{心体} \xrightarrow{\text{通}} \text{一体化の志向}$ （すなわち、コミュニケーションによる交わり）への移行を画する (It marks the transition from seeking unity via the body to seeking unity via the mind)。 「エディプス的な問題 (Oedipal problem)」をもつことは、それゆえ、移行そのものが大きくは失敗に終わったことを、端的に示している。その際、各人は、身体的段階に強く付着したままに留まっているか（いわゆる固着現象：fixation）、あるいは、身体的段階から切り離されたままに留まっている（いわゆる抑圧現象：repression）。いずれにせよ、そこに見られるのは、身体的段階（あるいは、情緒的・性的な衝動一般）を超越し、これを統合する過程での失敗 (failure) である。その際、切り離され孤立化した衝動は、意識への参与からも疎外されて、今や、兆候、不安、懊悩といった、病的な様式へと帰っていく。それゆえ、私にはこう思われた。なぜフロイトは、エディプス・コンプレックスを普遍的なものと考えたのか。それは、身体から心体への移行が普遍的な過程に属し、エディプス・コンプレックスは、いうならばここでの移行の転回点 (the swivel point) を示しているからであると。

むろん、エディプス的な転回点ないし移行点 (transition points) の他にも、さまざまな移行点が見られる。物体→身体→心体→魂体→霊体といった、内的発達の辿る全行程の中で、エディプス・コンプレックスは、身体的段階から心体的段階にいたる移行を画するにすぎない。これに先立って、物体的自己から身体的自己への移行が、口唇的・感覚器的段階という、いわゆるプレ・エディプスの段階 (pre-Oedipal stages) において、すでに生じていることはいうまでもない。（その一例を示すなら、口唇段階は、原初

の、物的で、新生児的な主客融合の段階から (from), 個人的で、分離的な身体自己の段階への移行を画する。この移行は、幼児が、自らの身体自己を大きくは物的環境から、わけでもプレ・エディプス的な母なるものから区分することを学ぶ大切なものであるから、これまでも、マラー (A. Mahrer), クライン (M. Klein), フェアヴァーン (W. Fairbairn), さらに客体―関係理論を奉じる重要な学派の人びと一般の手で、集中的に研究されてきた)。けれども、高次の移行 (すなわち、心体自己から魂体自己への、そして、魂体自己から霊体自己への移行) については、フロイト理論は、(正統派の心理学一般がそうであるように) お話しにならないほど役に立たない。そういったわけで、私は、口唇的移行やエディプス的移行 (the oral and Oedipal transitions) といった低次の移行に対応する、高次の移行のあることに人びとの注意を喚起するべく、『The Atman Project』ではとりわけこの点を強調して、高次の移行がもつ諸々の特性の素描にも着手した。ここで注意してほしいのは、高次の移行が、「エディプス的衝動の昇華形態 (sublimated Oedipal impulses)」としては語られていないことである。逆に、エディプス・コンプレックスは、移行の力学の最低段階に位置する諸様式の、あくまでもひとつにすぎない (The Oedipus complex is one of the lowest forms of transitional dynamics)。とはいえ、段階の高低を問わず、これらの移行には、分化 (differentiation), 超越 (transcendence), 統合 (integration) といった同一の発達様式と、遊離 (dissociation), 停滞 (alienation), 分晶 (segregation) といった同一の発達障害ないし病理様式が、はっきりと共有されている。私に、とりわけ強い関心を抱かせるのは、他でもない、こういった交差レベルでの対比 (cross-level parallels) であった。

以上の線に沿って研究を進めた結果、わかったことのひとつとして、今日もっとも重要でもっとも広範に認められるコンプレックスが、身体自己から心体自己への変形障害としてのエディプス・コンプレックスではなく、心体自己から魂体自己への変形障害、あるいは、個人的・心的・自我的な領域から、超越個人的・霊妙的・超自我的な領域への変形障害としてのアポロン・コンプレックス (the Apollo complex) (とわれわれが名付けるところのもの) であることがある。魂体自己から霊体自己への変形障害としてのヴィシュヌ・コンプレックス (the Vishnu complex) は、超進化の段階において生じるため、これに悩まされるのは、(私が少し触れるであろうように) 極度に内的な進化を遂げた瞑想の徒のみ (only advanced meditators) である。

アポロン・コンプレックスやヴィシュヌ・コンプレックスといった、高次のコンプレックスの正体については、私個人の瞑想体験を通し、痛いほどにはっきりと理解された。『No Boundary』を書き上げた頃、瞑想の訓練も、厳密には進歩したといえないにせよ、もはや初心者域を超えていた。(蓮華のポーズを保つ際に) 脚に覚える耐えがたい苦

痛は、今や制御できるところにまで達し、内的覚醒（awareness）も、隙なくリラックスし、活力にあふれつつ超然とした禅の姿勢をマスターする中で、段階的な上昇を遂げた。とはいえ、私の内的状態は、仏教徒がいうところのサル（*that of a monkey*）の心状態にあった。いやおうなく活動に向かい、しつように活動へと駆りたてられた。心体段階から靈妙段階への変形障害である、私自身のアポロン・コンプレックスに直面したのは、この時であった。ここにいう靈妙段階（あるいは、キリスト教的神秘論者の言を借りるなら「魂体（soul）」）は、超越個人的領域の入口ないしは開始点（the beginning）である。それ自体が、心体を超え、自我を超え、言表を超えたものとしてある。靈妙段階に到ろうとするなら、（あらゆる（all）内的変形の場合と同様）ここでも、低次の段階（この場合には、心体的・自我的段階）を「死に切（die）」らなくてはならない。「死に切る」という行為に躓くこと、あるいは「死に切り」えないことが、アポロン・コンプレックスなのである。エディプス・コンプレックスを内にもつひとは、無意識のうちに、身体自己と快楽原理に固着して留まるが、同様に、アポロン・コンプレックスを内にもつひとは、無意識のうちに、心体自己と現実原理に固着して留まる。（ここで用いる「現実（Reality）」とは、「制度的で、合理的な、言表可能である現実（institutional, rational, verbal reality）」を意味する。こういった「現実」は、慣習的には十分にリアルなものといえる。それはしかし、アートマンに到る行程の、ほんの中継段階であるにすぎない。真実在そのものの抽象としてあるにすぎない。だから、これへの固着は、結果として、真実在の発見を究極において妨げる）。

私自身に備わった、いやおうなしの、しつようきわまりない思考の習慣との闘い——それは、特定の神経症からくる特定の（particular）強迫的な思考内容（それは、時として、エディプス・コンプレックスを長期に保持するサインでもある）を相手とした闘いではなく、思考の流れそのもの・思考作用そのものとの闘いである——は、かつて取り組んだ課題のうちでも至難の課題に属した。かつて直面した闘いのうちでも、最高に困難な闘いであった。この闘いの難度が、仮にもう1パーセント上回っていたなら、私は、みじめな敗北を喫したことであろう。（こういった皮切りの闘いの内容を見事に説明したものに、ワルシュ（R. Walsh）の作品がある）。私がいくばくかの進展を示し、結果として、心的矛盾の浮動の数々を超え出て上昇し、たとえ初歩的な形でではあったにせよ、比較を絶した程により深く、よりリアルで、真実在にいっそう浸透され、明晰さへといっそう開かれた一つの領域をとにかくも発見できたのは、まさしく幸運の一言に尽きる。この領域こそは、他でもない靈妙段階であった。それは、アポロン・コンプレックスを切り抜けたのち、われわれの前に立ち現われる。ここでは、思考作用は（時として、わけてもはじめの時期に停止することはあっても）必ず（necessarily）停止するというわけではない。思



考作用は、それが生じる場合ですら、明晰さと覚醒に満ちたこの幅広い背景を何ら減じることはないというだけである。(これについては、たとえば、ジョン・ウェルウッド (John Welwood) の行った「超越個人的土壌 (transpersonal ground)」への透徹した説明を見てほしい)。霊妙段階に達して以後、われわれは、もはや「さまざまな思考内容の内に迷い込む (gets lost in thoughts)」ことはなくなる。むしろ、さまざまな思考内容が、意識の内に入りきたり、雲が大空を横切るように、再びそこを去っていく。その際に感じられるのは、滞りのなさ (smoothness)、深い恩寵 (grace)、明晰さ (clarity) といったものである。まといつくものは何もなく、すれあうものは何もなく、耳ざわりにきしるものは何もない。莊子はこう表現している。「完全な状態に到った人間は、自らの心を鏡として用いる。彼の心は、何ものも把まない。何ものも拒まない。すべてを受け容れつつ、何ら保持しない (The perfect man employs his mind as a mirror. It grasps nothing; it refuses nothing; it receives, but does not keep)」と。

とはいえ、瞑想の中で現実に体験される霊妙段階の味わいは、とてつもない、畏敬に満ちた、底の深いものである (通常は、まさにそういった形をとる)。というのも、これは、アルケー・タイプ (archetypes : 原型それ自体) ないしはアルケー・タイプの神性 (archetypal deity) の段階を指すからである。——ユングの指摘にもある通り、常にヌーメニックなあり方を保つ当のものとの直面 (confrontation with which is always numinous) が、この段階であるからだ。私にとって、それは、きわめてリアルできわめて没入的な時期であった。というのも、私が、世界を正真正銘に聖なるもの・淨いもの (actual sacredness) として直接にはっきりと体験できた、それは最初であったからである。この時、プロチノス (Plotinus) も語ったように、世界は、根源的一者から発出し、根源的一者の表現としてふるまう当のものであると、私にははっきりと体験された。ああ、以前にも、霊妙段階の皮切りの部分を、——さらには、発展の連鎖においてそれを超える段階の皮切りをも——ほんの簡単に、ちらとながめたことはあった。その時にはしかし、いまだ正式に、この段階に導き入れられるには到らなかった。私は、今もって、真に入会式を済ませてはいなかったのだ。ある禅の大家は、かつてこう語った。悟りの第一段階である強い見性 (ken-sho) に直面して、われわれの示す固有の応答は、哄笑ではなくてすすり泣きである (not to laugh but to cry) と。これこそは、私が為したところのものであった。それは、数時間も続いたように思われる。その際の涙は、実に、感謝 (gratitude) の涙、あわれみ (compassion) の涙、自らが無価値であること (unworthiness) の涙、そして最後に、尽きることのない驚嘆 (infinite wonder) の涙であった。(これは、断じて卑下ないしは謙遜のポーズではない。この段階に達しながら、自らの価値なきことを実感しなかったような人物に、いまだお目にかかった験しがたい)。哄笑 (laughter) が——

それも、とてつもない哄笑が——、次いで私を訪れた。これが、すすり泣きに先立って訪れたなら、おそらく、霊妙段階の神聖さを汚すものとなっていたことであろう。

以下次号に続く

(Part II. 了)

## An Introduction to the Human Nature Theory of Ken Wilber

——Through the whole translation of ODYSSEY (Part II)——

Yoshihiko MURASIMA \*, Masaharu KHONO\*

Masahiko SOGA\* \*, Etsuji KOYAMA\* \*

\* *Department of Fundamental Natural Science  
Okayama University of Science*

\* \* *Department of General Education  
Okayama University of Science*

(Received September 26, 1985)

This is Part II of the whole translation of Ken Wilber's ODYSSEY (Journal of Humanistic Psychology, Vol. 22, No. 1, Winter 1982, pp. 57-90). In this Part II, I translated pp. 67-80. It includes next four chapters: "Transition", "Stages", "Telos" and "Atman".